

歴史的アプローチによる 地域特性の読み取りと場所づくりの試み

福島 秀哉¹

¹正会員 博士(工) 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻
(〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:fukushima@civil.t.u-tokyo.ac.jp)

本稿では、社会基盤整備に関わる諸計画に際した地域特性の読み取りと、各計画およびその計画を位置付けるべき地域戦略等への反映可能性について論じる。特に研究・実践の蓄積が少ない、社会-空間地域特性のモデル性が低くその構造的分析が難しい地域への適用を視野に入れた実践的方法論の提案に向けた考察をおこなう。具体的には、これまで計画分野の場所論において参照されてきた民俗学の村落空間論において提示されている、民俗と場所の関係を探る2つのアプローチに着目し、その一つである歴史的アプローチを用いた地域分析および計画実践による地域特性をいかした場所づくりの可能性を論じる。

キーワード: 地域特性, デザイン戦略, 場所, 村落空間論, 歴史的アプローチ

1. はじめに

(1)背景

社会基盤整備に関わる諸計画に関して、人口減少、高齢化に起因する地域課題などへの対応の必要性から、構造物のデザインや魅力的なパブリックスペースの創出などの単事業による空間の価値の向上のみならず、それらを通じた地域の再生や活性化への取り組みが求められている¹⁾。そのためには、計画に関わる専門的取り組みが、各地域の再生や活性化に向けた戦略に位置付けられ、その成果がより高次の目的を果たしていくことが重要となる²⁾。また地域の構成単位である基礎自治体の立場からは、社会基盤整備を含めた地域戦略や、それを達成する空間デザイン戦略の立案が必要となる。さらに、地域課題の工学的解決にとどまらず、地域住民をはじめ、基礎自治体、NPO、企業・ボランティアなど多様なアクターの計画プロセスへの主体的な参画を通じた、地域社会、コミュニティの再構築、地域の場所づくりが同時に求められてきている³⁾⁴⁾⁵⁾。しかし、地域課題の表出の仕方、その対応方法は地域によって異なり、取り組みの前提となる地域特性の読み取りの重要性が高まっている。

以上より、社会基盤整備に関わる諸計画を、地域戦略の立案や計画との関連付けを通して、地域課題の解決、地域社会の再構築、地域の場所づくりに寄与するより効果的なものにするため、計画の対象をとりまく地域の社会と空間、およびその関係性に関する特徴(以下:社会-空間地域特性)の読み取りや、計画への適切な反映に関する、実践的手法論の充実が求められているといえる。

(2)既往の研究と本稿の位置付け

これまで、社会-空間地域特性の分析に関する知見は、場所論や領域論を対象とする既往の研究、取り組みの中で議論されてきた。主に集落の空間や社会的特徴が現代に至るまで維持されており、比較的社會-空間地域特性を分析しやすい地域(以下:モデル性の高い地域)に着目した研究が多く、重村、山崎らによる中久保集落の一連の研究などはその代表例といえる⁶⁾⁷⁾⁸⁾。また伝統的建造物群保存地区(以下:伝建地区)や世界遺産、重要文化的景観(以下:文化的景観)等の保全計画などを中心に研究の蓄積と計画論への展開がおこなわれている⁹⁾。

一方、一見社会や空間のあり方が変化したようにみえる現代の生活空間においても、部分的な景観や空間的特徴、地域社会における共同体的な住民間の結びつき、引き継がれる伝統行事など、断片的な社会-空間地域特性が残る地域もある。またそのような地域では、土地利用や土地所有などを通じた地域住民と生活空間の關係に、潜在的な地域特性が残っている可能性もある。

このような地域は、社会-空間地域特性に関するモデル性が高い地域とはいえず、これまで主たる研究対象とはなっていなかった。しかし、近年保全計画に限らず様々な諸計画において、地域の固有性、多様性を活かした住民主体のまちづくりが求められている中、より多様な地域の社会-空間地域特性の読み取りと、公共事業や景観施策などの計画への反映が求められるといえる。

以上より本稿は、社会-空間地域特性のモデル性が低い地域においても、その断片的、潜在的な地域特性から、地域の固有性の基礎となる社会-空間地域特性を明示し、

多様なアクターと共有しながら、地域戦略の提案、地域戦略に位置付けられた具体の社会基盤整備の諸計画をおこなっていく実践的方法論について論じる。

具体的には、後述する既往研究の整理より、これまで計画分野の場所論等で多く参照されてきた民俗学の村落空間論において提示されている、民俗と場所の関係を探る2つのアプローチに着目する。さらに、その一つである歴史的アプローチによる地域特性の分析および計画実践の展開による、社会-空間地域特性のモデル性が低い地域における場所づくりの可能性を論じたい。

2. 村落空間論の概要

(1)計画分野における集落研究と村落空間論

計画分野への適用を視野に入れた集落研究は、近代都市計画論への反省を背景に、1970年代頃より建築や造園などの分野において本格的に行われ、現在までに多くの蓄積がある¹⁰⁾。これらの集落研究は、方法論として民俗学における村落空間論を参照したものが多く、以下既往文献を参考に村落空間論の概要を整理する¹¹⁾¹²⁾。

民俗学の村落空間論の前提となる領域論は、当初村落内の秩序としての社会集団・社会組織の解明が課題であった民俗学において、村落の共同体が集落域の水と山の土地利用を基礎とするため、村落社会を集団としてのみで理解するのではなく、村落が存続してきた一定の大地と共に理解すべきと気づいたことから始まった。その後、領域の概念は、1970年の世界農林業センサスにおける集落の定義「一定の土地(地理的な領域)と家(社会的領域)とを成立要件とした農村の地域社会(ルーラル・コミュニティ)」として定着し、その後村落領域が研究対象として広く取り上げられるようになった¹³⁾。

それ以降、村落空間論は、境界の神を村落の社会構成との関連で理解しようとした原田¹⁴⁾や、「その道路も並木も、川や池や橋も、家やしきや社寺や田畑の区画も民間伝承」と述べ、村落の物質的な側面に着目し、村を全体的に捉えようとした桜田¹⁵⁾などにより、各地域の民俗を理解する地域民俗学へと展開した。これは柳田が全国各地の事例を地域と切り離して収集し、共通の時代性を考察したことへの批判として位置付けられる。

福田は1980年の村落領域論により、それまで個別に論じられていた村落とその外側の空間を統一的に捉え、ムラ-ノラ-ヤマの同心円で村落領域を表した¹⁶⁾。その内容は土地利用の実態と象徴論的境界論が混在したものであったが、明確に村落社会と空間の関係を表すモデルとして、民俗学と他の分野をつなぐ媒介の機能を果たし、計画分野においても多く引用された。村落領域論は簡潔

なモデルで示されたため、それを援用し一般モデルへの展開を試みた研究もみられたが、本来この福田の村落領域論も、原田や桜田の流れを受け各地域の個別の民俗を研究する方法として提出された点に留意する必要がある。

その後の村落空間論は、松崎¹⁷⁾や市川¹⁸⁾といった土地利用や景観に重点を置く実体的空間論と、鈴木¹⁹⁾らによる境界を中心とする象徴論的空間論へそれぞれ展開した。さらに社会学(鳥越²⁰⁾、川本²¹⁾など)、地理学(八木²²⁾、今里²³⁾など)、建築学(上田²⁴⁾、神代²⁵⁾、稲垣²⁶⁾など)をはじめとする近隣諸分野へと学際的に展開した。

(2)構造論的アプローチと歴史的アプローチ

村落空間論において実体的空間論を展開した市川は、著書の中で既往の村落空間論の展開を概観している。その中で、特定村落の空間全体を対象とした全体空間論と、部分空間論を整理し、村落空間論が民俗の母体である村落の全体的理解を目的として確立した領域であることを想起すれば、部分空間論においてそれまで研究者の関心が集中してきた境界に加えて、村落の核、全体を象徴する中心に関する研究の必要性があると指摘している。

さらに空間の表象に対象が限定された村落空間論が、場所と民俗事象の関係に関する本質的議論に展開する必要性に言及し、場所については地理学の定義を参照し、「経験によって再構成された意味の中心」と理解した上で²⁷⁾、民俗と場所の関係を探るアプローチについて二つの方法を例示している²⁸⁾。

一つは、場所の背景に存在する「隠された構造」を探り場所の特性を明らかにする方法(以下:構造論的アプローチ)であり、その特徴を場所の特性をフィールドを超えた普遍性をもって理解できることにありと指摘している。社会や空間の隠された構造を探り、一般化できるモデルとして抽出する方法は、様々な分野で試みられており、実践では各保全計画の正当性の議論などに適用されている。特に自然科学分野と親和性が高いアプローチといえるが²⁹⁾、先に指摘したモデル性の高い地域を対象としない場合、その構造の抽出は難しいといえる。

一方もう一つのアプローチは、場所の特性を歴史的に探ることによって集団にとっての場所の記憶の意味を求める方法(以下:歴史的アプローチ)である。その特徴はフィールドにおける場所の意味が明確になりやすいことにありとされ、場所の歴史そのものではなく、ある特定の空間を住民がいかに関験し解釈して場所化していったかという過程が重要であると指摘されている。このようなアプローチは建築分野における場所論でも議論されており³⁰⁾、個々の対象地の場所の意味を探る計画論において、展開可能性が高いアプローチだと考えられる(図-1参照)。

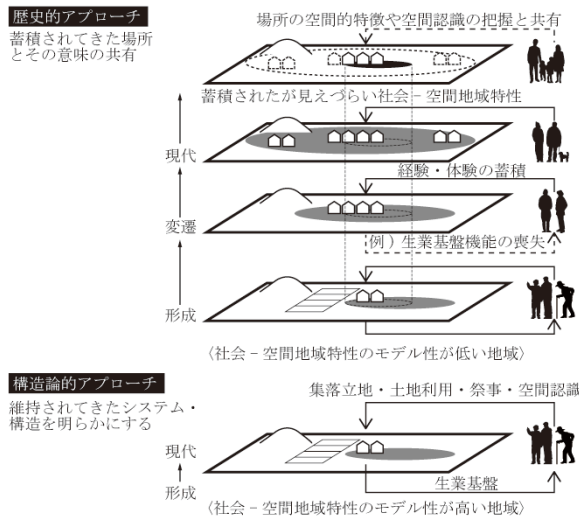


図-1 歴史的アプローチと構造論的アプローチのイメージ

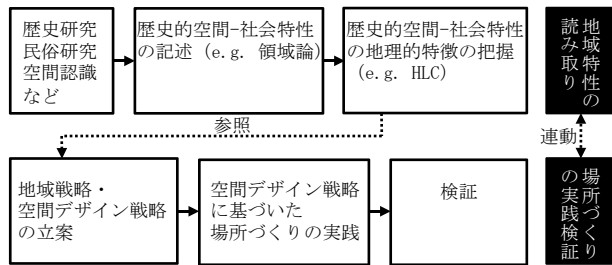


図-2 社会-空間地域特性と連動した計画実践の提案

(3) 歴史的アプローチの計画実践への展開可能性

本節では、先述の歴史的アプローチによる地域特性の分析および計画実践への展開による、社会-空間地域特性のモデル性が低い地域における場所づくりの可能性を考察する。

まず始めに、歴史的な場所の特性、ある特定の空間を住民がいかに関験し解釈して場所化していったかの把握、言い換えれば、動的な歴史的な社会-空間地域特性の把握が必要となる。しかし、計画論を前提に社会そのものを直接的に把握し、記述するのは非常に難しい。そのための方法論としては、福田の村落領域論を援用による、歴史的な社会-空間地域特性、地域住民の体験や経験が蓄積されている場所の記述が考えられる。福田の村落領域論は、計画学や地理学分野において、領域の変化を記述するモデルとしても採用されており、動的な歴史的な社会-空間地域特性の記述に適していると考えた。

さらに、空間デザイン戦略に向け、歴史的な社会-空間地域特性と対応した現代の地理的特徴を把握する必要がある。これに対しては、村落領域論の一部が土地利用の実態を捉えていることに着目し、公図を用いた土地利用変化の分析に基づく歴史的景観特性アセスメント手法、土地利用の年代測定により景観の時間的奥行き (Time-depth) を可視化することで、点としての文化財ではなくエリアとしての歴史的価値を評価する手法であるHLC

(Historic landscape characterisation)³¹⁾の適用を提案したい。HLCは、公図が入手可能であれば土地利用の重ね合わせにより、景観の時間的奥行きを地理的に把握できる優れた手法であるが、社会-空間地域特性と連動した考察をおこなった研究は未だ少なく、方法論としても展開の余地があると考えている。

これらの結果は、仮説的に歴史的な社会-空間地域特性と、それに対応した現代の地理的特徴を提示するが、先に歴史的アプローチに関して指摘したように、そこから普遍性を持った構造の抽出、あるいは一般化できるモデルの構築への展開は難しい。しかし、当該地域における空間デザイン戦略の前提として重要な示唆を与えられる。さらに、現代の地域住民の空間認識³²⁾や、伝統行事などの民俗事象に関する研究と重ねあわせることで、これらの現代の地域特性を歴史的な社会-空間地域特性に位置付けて考察することが可能となる。

以上のプロセスを経て把握した歴史的な社会-空間地域特性を踏まえた空間デザイン戦略を策定し、その実践、検証をおこなうことで、調査、研究から、計画、実践が連動した計画論への展開が期待される (図-2参照)。計画、実践の効果検証については、公共空間整備等の効果検証に関する既存の取り組みに関する枠組みの適用などが考えられる。特に、既往の公共空間整備の取り組みにおいてあまりおこなわれてこなかった、従前のデータ収集と、従後との比較による効果検証が望まれる。

3. デザイン戦略による場所づくりの試み

(1) HLCと領域論による地域特性の読み取り

本章では、筆者が地域戦略とそれに基づく空間デザイン戦略の立案に携わっている山中湖村にける歴史的な社会-空間地域特性の分析と空間デザイン戦略の立案、場所づくりの実践の一部を紹介する。山中湖村のまちづくりのプロジェクトは、本稿が提案する方法論を始めから意図していたわけではないが、現在、歴史的な社会-空間地域特性の分析と空間デザイン戦略の連動を試みており、その観点から編集して述べる。なお、研究および実践の詳細については既往の研究、報告を参照されたい^{33) 34) 35)}。

山中湖村に関する歴史研究により明らかになった史実を、空間と地域社会の関係の観点から整理し、その結果を村落領域論を援用して記述した (図-3参照)。これにより近世の各集落中心部の屋敷地が集中していた字への居住が、近世集落の生業、土地利用とそれを支えた村落共同体の構成員となる前提であったこと、その社会-空間の関係が戦後の観光地化によって変化したことを明らかにした。また、筆者はこの社会-空間の関係の履歴が

残る近世の屋敷地の範囲を本拠領域と定義した³³⁾。

次にHLCを用いた土地利用の変遷に関する分析により、上記で定義した本拠領域の現代における地理的特徴と景観の時間的奥行きを明示し、伝統行事などの民俗事象と重ね合わせることで、インフラ整備と観光地化により空間が変化しながら、本拠領域に該当する集落中心部の宅地としての土地利用、またその面地形形状が各集落に残っていることを示した³⁴⁾ (図4参照)。

これにより、地域住民によって暗黙に了解されている、集落中心部の重要性や、空間あるいは空間利用に断片的に残る地域特性を、歴史的な観点から総合的に分析・記述し、計画の前提として関係者と共有することができた。

(2)空間デザイン戦略への反映

この結果は、山中湖村デザイン戦略会議において共有され、村のまちづくりに向けた村全体のデザイン戦略の基礎に置かれた。また、歴史的な社会-空間地域特性に関する研究成果の一部は冊子として住民に配布された。

山中湖村デザイン戦略会議は、歴史的な社会-空間地域特性の分析の結果に加えて、地域住民のエコミュージアムの取り組みで整理された地域資源、公共事業で予定している公共空間の整備計画・構想のイメージ、地域住民によるまちづくり活動等を整理し、地区ごとに一枚の絵にまとめたデザインノートを作成した (図5参照)。デザインノートは、空間デザインを含めた地区ごとのまちづくりの将来像をイメージ・共有しやすくし、地区における各取り組みの連動を生むきっかけになることを意図している。例えば、平野交差点整備 (2018年月竣工) などは、当初予定の3地区交差点整備の嚆矢として進められるとともに、先述した歴史的な社会-空間地域特性からみて、地域の中心としての意味が現在も残る場所であり、そのような整備対象地の地域における多層的な場所の意味をデザインノートを通じて共有しながら整備された事業である。その結果整備後は、交通事情などにより開催場所が変更されていた伝統行事が、地域の話合いにより自主的に集落中心部に整備された広場に戻されるなど、竣工直後から地域のための場所として活用されていく様子がみられている (写真-1参照)。

現在、山中湖村を構成する他の集落においても、同様のアプローチによる場所性を軸とした空間デザイン戦略の立案、空間デザインやまちづくりの実践が取り込まれており、地域住民の主体的な取り組み、歴史的な社会-空間地域特性を共有した上での多様なアクターと協働によるまちづくりの展開が期待される。

(3)成果と地域への影響および今後の展開

就任直後より現体制によるまちづくりを推進してきた

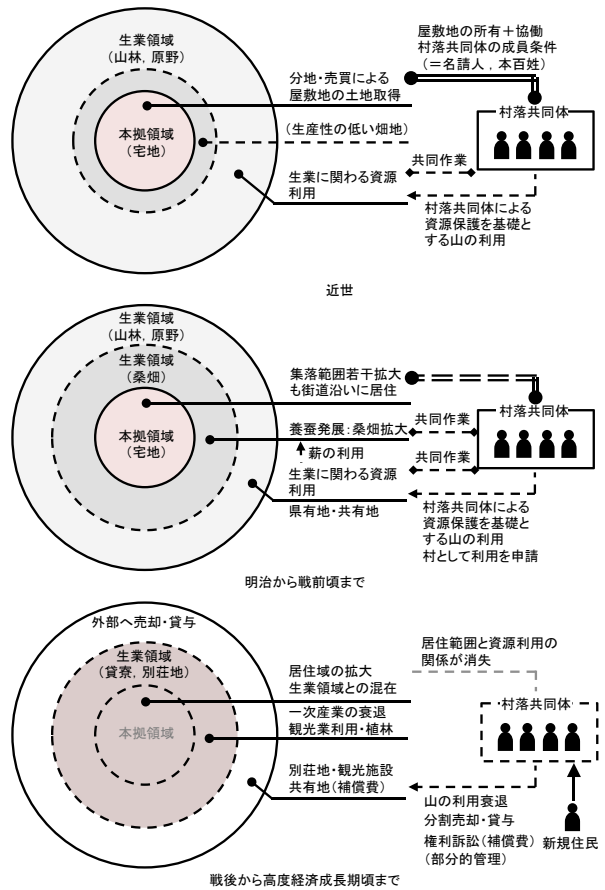


図3 村落領域論を援用した社会-空間地域特性の記述

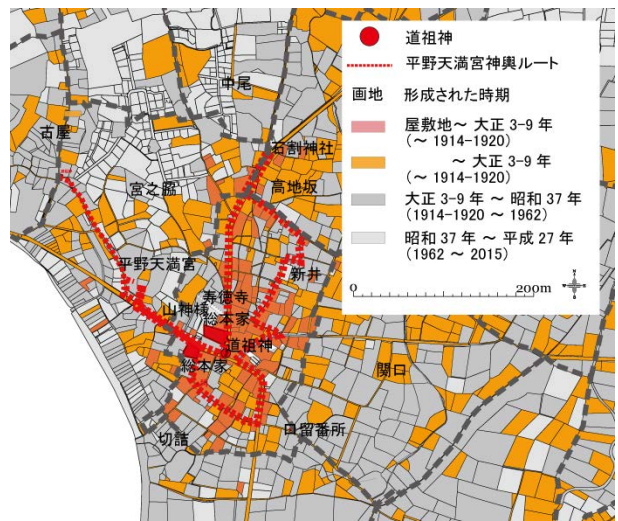


図4 歴史的な社会-空間地域特性の地理的特徴の記述 (平野区)

高村村長は、研究活動による社会-空間地域特性の分析と公共空間整備の連携についてのヒアリングの中で、「地域の生活文化を知るための歴史研究は非常に重要」「地域の生活文化に基づく整備は、必ず住民のためになると確信している。」と述べている³⁵⁾。さらにこれまでの取り組みの成果について、「平野交差点整備など、地域の何十年もの懸念事項を解決する成果が4年間の取り組みで生まれている」「役場内にも少しずつまちづくりの考え方が浸透してきていると実感している」と述べ、地



図-5 山中湖村デザインノート（平野区）



写真-1 平野交差点整備北工区竣工後の祭の様子（2017.7）

域コミュニティに波及する成果について言及している。一方課題として「エコミュージアムの取組みの展開などソフト面の充実がこれからの課題」と指摘している³⁵⁾。

また、このようなデザイン戦略に基づく公共空間整備の推進と様々な活動との連携などの取り組みを計画論に展開していくため、新たな事業評価手法の枠組みの整備を行っていく必要があると考え、継続的な地域住民へのアンケート調査等を実施し始めている。地域のまちづくり活動も、行政による公共空間整備と連動・協調しながら、住民主体の展開を見せており、今後ますますの活動の発展と連携が期待される。

4. おわりに

地域特性の継承は重要な論点だと考える一方で、東日本大震災の復興事業などで筆者が直面した課題として、盲目的・固定的なコンテキストの継承は密度の低下をもたらすとも考えている。その解決のためには、社会-空間地域特性を複合的な視点から分析し、地域における場所性を濃淡のある連続したものとして捉えることが重要だと考えている。またそれを計画に位置付け、実装し検

証をすることで、一連の方法論として議論していくことが必要だと考えている。本稿は議論の枠組み、言葉の定義など未熟な部分が多々あるが、今後実践も踏まえ計画論に関する議論を展開していく意思表示として捉えていただければありがたい。

当然、地域再生の現場において、経済や産業など多要素を関連させた議論が展開されるべきである一方で、それを下支えする社会-空間地域特性の影響は決して小さくないと考えている。歴史的アプローチと構造論的アプローチの厳密な学術的位置付けや方法論の精査、歴史的アプローチの成果を計画へ反映していくことの正当性など、今後研究と実践を蓄積しながら考えていきたい。

参考文献

- 1) 「広がる土木景観の役割」（『土木学会誌』第101巻 第6号（2016年6月号），pp6-37
- 2) 景観・デザイン委員会拡大幹事会編：景観・デザイン委員会設立20周年記念シンポジウム資料集「景観・デザインは日本を救うか？-都市・地域の再生に向けて」,土木学会景観・デザイン委員会,2017
- 3) 国土交通省（2014）『新たな「国土のグランドデザイン」（骨子）』p4
- 4) 中村良夫，鳥越皓之：風景とローカル・ガバナンス 春の小川はなぜ失われたのか，早稲田大学出版，2014
- 5) 羽貝正美他編：東京経済大学国際シンポジウム 自治しうる〈主体〉と〈場〉を問いなおす-基礎自治体のサステナビリティとローカル・ガバナンスに関する国際シンポジウム-報告資料集，2016
- 6) 重村力，山崎寿一：中久保集落の共同性の展開過程 共同性の空間構造，日本建築学会計画系論文集，Vol.424，pp.101-108，1991
- 7) 山崎寿一，重村力：中久保集落における集落域の土地利用と土地割形式 共同性の空間構造，日本建築学会計画系論文集，Vol.443，pp.133-141，1993
- 8) 山崎寿一，重村力：生活地名からみた中久保集落の空間意識の構成 共同性の空間構成，日本建築学会計画系論文集，Vol.451，pp.167-176，1993
- 9) 麻生美希，増田美樹，佐藤睦美，西山徳明：農村集落における空間構成の変遷と景観保全の課題，日本建築学会計画系論文集74（646），pp.2637-2645，2009
- 10) 社団法人日本建築学会：図説 集落-その空間と計画 第1版，都市文化社，1989
- 11) 市川秀之：広場と村落空間の民俗学，岩田書院，2001
- 12) 福田アジオ：現代日本の民俗学 ポスト柳田の五〇年，吉川弘文館，2014
- 13) 農林省統計調査部：1970年世界農林業センサス 農業集落調査報告書，1972
- 14) 原田敏明：村の境，社会と伝承，14，1957
- 15) 桜田勝徳：村とはなにか，日本民俗学大系，Vol. 2，平凡社，1958
- 16) 福田アジオ：村落領域論：武蔵大学人文学会雑誌(神田秀夫教授記念号)Vol.12(2)，pp.217-247，1980
- 17) 松崎憲三：景観の民俗学，国立歴史民俗博物館研究報告，Vol. 4，1984
- 18) 市川秀之：広場と村落空間の民俗学，岩田書院，2001
- 19) 鈴木正崇：祭祀と空間のコスモロジー，春秋社，2004

- 20) 鳥越皓之：部落・町内の境界，ソシオロジ，Vol. 21 no.2, 1976
- 21) 川本彰：村落の領域，村落社会研究，Vol. 8, 1972
- 22) 八木康幸：民俗村落の空間構造 御影史学研究会民俗学叢書-関西学院大学研究叢書(12)，岩田書院，1998
- 23) 今里悟之：農山漁村の〈空間分類〉-景観の秩序を読む，京都大学学術出版会，2006
- 24) 上田篤：人間の土地 -生活空間のモノグラフ，鹿島研究所出版会，1974
- 25) 明治大学工学部建築学科神代研究室編：日本のコミュニティー，SD別冊，Vol. 7, 1975
- 26) 東京大学工学部建築学科稲垣研究室：奈良盆地における住宅地形成の解析，住宅建築研究所，1982
- 27) イー・フー・トゥアン著，山本浩訳：空間の経験，筑摩書房，1993
- 28) 前掲18)
- 29) クロード・レヴィ=ストロース著，大橋保夫訳：野生の思考，みすず書房，1976
- 30) アルド・ロッシ著，大島哲蔵，福田晴虔訳：都市の建築，大龍堂書店，1991
- 31) 宮脇勝：歴史的景観キャラクタライゼーションに関する研究-鎌倉市中心部の寺社・道路・街区・水路・土地利用の歴史的景観特性アセスメント-，都市計画論文集47, pp.607-612, 2012
- 32) 伊藤庸一：農村集落における空間認識に見られる領域性に関する研究，農村計画学会誌，Vol. 4, No. 1, pp.16-28, 1985などの手法の援用が考えられる。
- 33) 福島秀哉：山中湖村における集落空間の近代的変容と村落共同体の領域形成に関する研究 -共同体の特徴を考慮した生活空間の計画論構築に向けて- (A Study on the Modern Transformation of Settlement Spaces and the Formation of Communal Territories in Yamanakako Village- Toward the Development of a Theory of Living Space Planning in Consideration of Community Features-)，東京大学学位論文，2017
- 34) 福島秀哉，佐井倭裕：道の変化および地域組織に着目した山中湖村長池区の集落空間の現代の特徴，ランドスケープ研究 (オンライン論文集) , Vol. 11, pp.47-58, 2018
- 35) 山口敬太，福島秀哉，尾崎信，尾野薫，木村優介，石橋知也，「地域の社会-空間」における研究方法論の模索-事例報告の分析を通じて-，土木計画学研究講演集, Vol. 57, 2018